「自分の都合を言わん人」(2020.7.19)

平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。（マタイ 5:9）

仙台朝祷会は毎週水曜の朝、仙台青葉荘教会で開かれ、毎回市内の牧師や神父、あるいは関係者を招き、奨励を聞き、共に祈り、食事を楽しみます。仙台にいた頃、私もその交わりにあずかっていました。ある時、カトリックの関係者が来られて、先週の説教(7/12)の「ミネヤン」のことを話してくれました。皆さんと再度この方から聴きたいと思います。

「ミネヤン」とは長崎の島原教会の信者です。この教会の神父の証からです。彼は母が娼婦で、父親を知りません。そのうえ2歳で母が病死します。親戚に預けられ、あっちこっちとやられ、養護施設に入り、63歳で召されたのです。人生の最後の半分33年間は精神病院でした。月に2回、神父はご聖体をもって（聖餐式のパン）ミネヤンを訪ねていました。ある時、ミネヤンは神父に自分の願いを伝えます。「死ぬ時に、あぁ、このひとは神様の子どもやった、そう言ってもらいたい」そして、パッと聖書を開き、上掲のマタイ5:9を示し、「だから、私は平和のために働きたい。」神父は揚げ足をとって、「ミネヤン、この精神病院で平和のためにどうやって働くの？8月6日と9日が来たら戦争反対って言って、この廊下をプラカード持って、あちこち行ったり来たりする？」そんなことを言うと、「そうですよね」と言って、ケラケラ笑ったのです。

やがて、ミネヤンは静かに天に召されました。遺体を引き取って司祭館に安置していた時、二人の掃除のおばさんが弔問にきて、「ミネヤンがおらんごとなって、寂しゅうなりました。こん人のおるところは平和だったんですよ」と言ったのです。神父さんは聞き返しました。「平和だった。どうしてですか？」。すると、「こん人は自分の都合を言わん人でしたから。患者同士がちょっと衝突したり、収拾がつかなくなったら、ミネヤンをその間にいれるんです。そしたら、静けさが戻るんです。」と。神父さんは行くたびに病室があっちこっちに変わっているので、「何でミネヤンはこんなにしょっ中変わるのかなぁ」と思っていましたが、その理由がやっと分かったのです。

そしておばさんたちは言ったのです。「あぁ、ミネヤンはここの人やったとですか？ミネヤンは神様の子どもだったとですか？今わかりました。」神父さんの脳裏に「私は死ぬ時に、神様の子どもだったと、そう言ってもらいたい。だから平和のために働きたい」そう言っていたミネヤンの言葉が甦ってきます。ミネヤンは親を知らない子どもだった。だから、彼が洗礼を受けた時、天の父が私の父だというのは飾りの言葉ではなかった。ミネヤンの死はみじめです。しかし、掃除婦のおばさんたちは、ミネヤンが神様の子だったと感じている。ミネヤンはその最期に神の面影をはっきりと見せたのです。

親の都合、親戚の都合、施設の都合、病院の都合。自分の都合がいつも後のミネヤンは、こう言います。「神父さん、今頃思うのです。人間は自分の都合で生きている間は苦しかとです。でも神父さん、神様の都合を考えるようになって、神様の都合に合わせて生きるようになれば、生きがいとか、自己実現とか、そういう難しいことはもうどうでもよくなるんです。だから私はこの頃、心穏やかです。わたしには都合はありません。」

私たちは復活のキリストに結ばれて、御心に生きている者として愛され、祝福されています。それゆえに、喜び、感謝して御心ファーストを心がけたいものです。